

図2 (続き) 地域保健・老人保健事業報告

入力項目説明

No	項目名	システムで集計可否	説明
(1)	相談、デイ・ケア、訪問指導実人員	△(仮入力)	(6)相談実人員+(17)訪問指導(重複しない整理番号をカウント)が仮入力されます。最終的には(1)≤(6)+(15)+(17)になります。印刷及び保存時チェックされます。
(2)~(4)	新規者の受付経路内訳	△(仮入力)	保健所把握新を対象とし相談契機コードにより振り分けます。
(5)	医療社会事業員が関与した者	△(仮入力)	(2)市町村=コード' 5、(3)医療機関=コード' 3、(4)その他=3,5以外のコード
(6)	相談実人員	○*	(1)のうち担当者として福祉職がチェックされているもの。 相談における実施方法が1所内面接の実人員数。 (期間における把握区分ではなく重複しない整理番号をカウント。把握区分が再であっても期間内にはじめての所内面接であれば1とカウントします。ただし、匿名は把握新と年度新の所内面接のみ対象) *入力不可
(7)~(13)	相談延人員の内訳	○*	入力されている相談の所内面接を地域保健・老人保健事業報告分類別に集計した延べ数
(14)	相談延人員の合計	○*	(7)~(13)の計 *入力不可
(15)	デイ・ケア実人員	×	
(16)	デイ・ケア延人員	×	(15)≤(16) 保存時または印刷時チェックされます
(17)	訪問指導実人員	○*	訪問における実人員数。 (期間における把握区分ではなく重複しない整理番号をカウント。) *入力不可
(18)~(22)	訪問延人員の内訳	○*	入力されている訪問を地域保健・老人保健事業報告分類別に集計した延べ数 *入力不可
(23)	訪問延人員の合計	○*	(18)~(22)の計 *入力不可
(24)	電話相談延人員	○*	相談における実施方法2電話の延べ数 *入力不可
(25)(26)	普及啓発の内訳	×	開催回数≤延人員 保存時または印刷時チェックされます。

患者調査に基づく精神疾患の保健統計指標の年次推移

分担研究者 藤田 利治 国立保健医療科学院疫学部疫学情報室長

研究要旨

地域精神保健推進の基礎資料とするため、1974年から1999年までの厚生労働省患者調査を用いて「精神及び行動の障害」（以下、精神疾患）にかかわる保健統計指標の年次推移を整理した。検討した保健統計指標は、①受療有病率、②退院率、および③在院にかかわる期間の3種類である。

- ① 受療有病率：精神疾患の人口万対の在院患者率は1974-76年の22.7から1999年の26.6へ微増であったが、外来患者率は1974-76年の36.9から1999年の118.0へと3.2倍に増加した。
- ② 退院率：精神疾患全体の1ヵ月間の退院患者数は1974-76年の18千人から1999年の27千人へと1.9倍増加した。退院率は長年にわたって低下したが、1980年代初めを底としてその後上昇・改善に明確に転じていた。治癒・軽快による退院率についてもこの傾向はみられるが、やや軽微なものであった。
- ③ 在院にかかわる期間：1999年10月時点での在院患者347千人の「継続在院期間」（ある時点での在院患者での入院時点からその時点までの期間）は、16%が3ヵ月未満、30%が1年未満、56%が5年未満であり、30%が10年以上の越える長期在院患者であった。年次推移については、10年以上の在院患者の割合が1975年の20%から1993年の33%まで増加し、以降わずかに減少して1999年には30%となった。1990年代初めまで継続在院期間の経年的長期化が明らかに認められ、長期在院患者の蓄積が示されてきたが、最近になって歯止めがかかり、わずかに短期化の傾向がみられた。退院までの「在院期間」の年次推移は、3ヵ月未満の退院割合では1975年の55%から1996年の66%へと増加し、経年的に単調に短期化する傾向が認められた。1996年については、347千人が入院して、その内の39%が1ヵ月未満に退院し、66%が3ヵ月未満、88%が1年未満に退院した。3年以上の長期在院は6%にすぎなかった。

上記の精神疾患にかかわる保健統計指標について、医療施設別、性別、年齢階級別および診断別の年次推移についても報告した。

A. 研究目的

精神疾患に関する保健統計を用いたこれまでの検討において、入院精神医療にまつわる在院患者率および平均在院日数の問題が指摘されてきた。この平均在院日数という指標は、年間入院患者数と年間退院患者数が年次的に一定で等しいという定常状態が継続し

ている場合には、在院期間の平均値になる。しかしながら、精神疾患の入退院に関わる状況は定常状態にはないことから、平均在院日数には在院期間の平均値という実質的な意味はない。精神病床についての平均在院日数が在院期間の平均値であるかの誤解が広くなされてきたことを含め、精神疾患に関わる

保健統計は過去において指標の不適切な解釈や扱いがなされたこともある。

本報告では、地域精神保健を推進するための十分な科学的活用がはかることを目的として、厚生労働省の患者調査に基づき精神疾患にかかわる保健統計指標の年次推移を整理する。

B. 研究方法

用いた資料は1974年から1999年までの厚生労働省患者調査病院票、一般診療所票、病院退院票であり、指定統計の目的外使用の承認を得て分析した（統発第0206003号、平成14年2月6日）。

対象患者は、主傷病がICD（国際疾病分類）の第10回改正により「精神及び行動の障害」（ICD10：F00-F99）に分類された在院あるいは外来受療中の患者である。1994年以前は第9回修正に基づいて傷病がコード化されているが、附表に示したコード変換により第10回修正に統一した。なお、第9回修正の「初老期痴呆」（290.1）、「他に分類された状態における痴呆」（294.1）、「精神痛」（307.8）は対象から除外した。以下では、「精神及び行動の障害」を総称して精神疾患と呼ぶ。

検討した保健統計指標は、①受療有病率、②退院率、および③在院にかかわる期間の3種類である。

① 受療有病率

各年次のある時点における在院患者数と外来患者数（当日は受療しなかった通院中の患者を含む）を推計し、両者を合計して「総患者数」（以下、「受療患者数」と呼ぶ）を算出した。総患者数の推計方法1)は、

$$N = \sum_{i=1}^{n_i} X_i + \sum_{j=1}^{n_j} Y_j + \sum_{k=1}^{n_k} (6/7) I_k Z_k$$

ただし

N：総患者数の推定値

X_i：在院患者iの乗数

n_i：調査された在院患者数

Y_j：初診患者jの乗数

n_j：調査された初診患者数

Z_k：再来患者kの乗数

n_k：調査された再来患者数

I_k：再来患者kの診療間隔

である。在院・初診・再来患者の乗数は、1984年と1999年は患者ごとに定められた値を、1983年以前は病院か一般診療所かによって定められた値を用いた。また、診療間隔が31日以上患者については、計算を簡略化するために、各年次別の精神疾患再来患者の平均診療間隔を用いた。この点は厚生労働省の総患者数の推計で該当する傷病分類ごとの平均診療期間を用いているのと異なり、推計値にごくわずかの差異を生じている。

在院患者数、外来患者数および受療患者数の単位人口（万対）当りの割合を、それぞれ在院患者率、外来患者率および受療患者率と呼ぶ。

患者調査の実施は1984年から3年ごとになったことから、それ以前については1974-76年、1977-79年および1980-82年の3年間をまとめることにし、該当する各年次の推計値を平均して表示した。精神疾患についての受療患者数および受療患者率の在院・外来別の年次推移を、医療施設別、性別、年齢階級別および診断別に集計した。

② 退院率

退院患者数については患者調査に準じた方法で調査月の1ヵ月間の数を推計し、さらに退院事由別に「治癒・軽快」「死亡」「転院・他」（不変を含む）の3つに区分した。また、上述の病院の在院患者数に対する退院患者数の指標として、次式の退院率を用いた。

$$\text{退院率} = \frac{1 \text{ ヶ月間の退院患者数} \times 365}{(\text{年央}) \text{ 在院患者数} \times 30}$$

退院率は年間の新入院患者数を用いてはいないという違いはあるが、病院報告での平

均在院日数と同様の情報・限界を持った指標であり、両者は逆数の関係にある。1.0/(在院患者・年)より大きな値では、平均在院日数が365日よりも短いことを意味する。

病院における精神疾患の1ヶ月の退院患者数および退院率の退院事由別の年次推移を、病院種類別、性別、年齢階級別および診断別に集計した。

③ 在院にかかわる期間

本報告では、入院から退院までの期間を「在院期間」と呼び、在院中の患者での入院時点からその時点までの期間を「継続在院期間」と呼ぶことにする。

在院期間別患者数と継続在院期間別患者数の推計方法は既に報告したが、附録に再掲した。今回は、各年次1年間に入院した患者コホートでの在院期間別患者数と、各年次10月末時点での在院患者の継続在院期間別患者数の年次推移を推計した。なお、標本調査のための偶然変動を小さくするため、1987年以降1999年まで3年ごとに実施された5回の患者調査での入院からその時点までの入院日数別患者数を用いて在院期間別患者数と継続在院期間別患者数をそれぞれ推計し、5回分を平均した成績を提示した。

病院における精神疾患での継続在院患者数(割合)および在院患者数(割合)の年次推移を、病院種類別、性別、年齢階級別および診断別に集計した。

C. 研究結果および考察

1. 受療有病率の年次推移

1-1. 総数および医療施設別

精神疾患全体の受療患者数は、1974-76年には66万人余りであったものが、1999年には181万人1,407千人へと2.7倍の増加と推計された(表1)。受療患者率においても、1974-76年が人口万対で59.6であったものが、1999年には144.6へと増加していた。しかし

ながら、内訳である在院患者率についてはわずかな増加にすぎず、受療患者率の上昇は外来患者率の増加によるところが大きい。特に、1980年以降の外来患者の増加が著しく、1988年の精神保健法施行以前から精神医療における外来医療の進展を認めることができる。

病院・一般診療所の別については、病院での人口万対の在院患者率は1974-76年の22.7から1987年の28.9まで微増し、以降はやや減少して1999年の26.4に至った(表1)。外来患者率は、1974-76年の25.0から1999年の76.4へとこの25年間で約3倍の増加を示した。一方、一般診療所の患者は当然ながら殆どが外来患者であり、外来患者率は1974-76年の11.9から1999年の41.7へと約4倍の増加であった。1999年については受療患者数の29%が一般診療所を受療していた。

病院種類別では、在院患者率については精神病院では1980年代末をピークとして微増から微減に推移した。一般病院などの精神病院以外の病院では、在院患者数は精神病院と比べて少ないが、経年的には増加がみられた。外来患者数はいずれの病院でも経年的に増加しているが、精神病院以外の病院での増加が顕著であり、外来患者率は1974-76年から1999年にかけて3.4倍に増えていた。精神疾患の外来医療で精神病院以外の病院が大きな役割を果たしていることが示唆された。しかし、精神病院においても1984年以降では外来患者数が在院患者数を上回っていた。

1-2. 性別および年齢階級別

性別の在院患者率、外来患者率および受療患者率の年次推移は、男女とも総数の場合と類似してパターンをとっていた(表2)。しかし、近年では女の受療患者率は男を上回るようになった。また、女に比べて、男の在院患者率が高いことが経年的にも確認された。一方、外来患者率は一貫して女で高率であった。

在院患者率の年齢分布は長年にわたって

一峰性のピークをもつ分布であり、そのピークは経年的に高齢方向に移動してきた。これを年齢階級ごとに在院患者率の年次推移としてみれば、35歳未満の各年齢階級では経年的に減少傾向にあり、35-44歳では1980年以降に減少傾向に転じ、45-54歳では微増してきたものが1980年代中盤からやや減少する傾向になり、それ以上の55歳以上の各年齢階級では増加、特に高年齢になるほど増加が著しかった(表2)。

一方、外来患者率は1980年以前と比べてそれ以降ではすべての年齢階級で増加が認められ、特に75歳以上では1999年は1974-76年に比べて4.8倍の増加であった。すなわち、外来患者率は全年齢階級で経年的に増加し、各年次の年齢分布は次第に高齢方向にピークを移動していた。高年齢における外来患者率は、在院患者率を上回る速度で増加していることが判明した。在院と外来を合わせた受療患者率も、高齢の年齢階級ほど経年的に激増していた。

1-3. 診断別

精神疾患のなかで最も受療患者数の多いのは統合失調症であり、地域精神保健推進の上で最も問題となる疾患である。1999年において、精神疾患に占める統合失調症を主とする「統合失調症、分裂病型障害及び妄想性障害」(以下、統合失調症等)の割合は、在院で64%、外来で31%であった(表3)。統合失調症等の在院患者率は1974-76年の人口万対16.3から1999年の17.0へと大きな変化がみられないのに対して、外来患者率は1974-76年の10.0から1999年の36.3へと増加した。1980年以降の外来患者数の増加が著しく、1983年以前は在院患者の方が多かったが、1984年以降では外来患者が在院患者を上回るようになった。

統合失調症等の性別の在院患者率、外来患者率および受療患者率の年次推移は、男女とも全体の場合と類似してパターンをとって

いた(表4)。しかし、女に比べて、男の在院患者率が一貫して高くなっていた。また、年齢との関係では、在院患者率は15-24歳および25-44歳の若い年齢階級では経年的に減少し、45-64歳および65歳以上では増加した。外来患者率は、いずれの年齢階級でも経年的に増加し、特に高年齢になるほど顕著であった。在院と外来を合わせた受療患者数では、15-24歳の若年統合失調症等が1974-76年の3.0万人から1999年の3.2万人へと大きな変化を示さなかったが、これ以上の年齢階級では高年齢になるほど受療患者数の増加がみられた。

若年の統合失調症等の入院および在院の相対的な減少については既に指摘されているところであるが、この理由として社会・家族・医療従事者側の様々な状況変化や外来薬物療法の進展の中で「軽症化」が生じているためともいわれている。若年層での在院患者数の減少は、地域における「新しい」慢性患者の蓄積をもたらすのではとの懸念もある。統合失調症の初発病期の90%程度を占めるといわれる15-24歳についての今回の外来患者率の経時的増加と在院患者率の経時的減少は、こうした指摘と整合するものといえる。

躁うつ病を含む「気分〔感情〕障害」の受療患者率は、1974-76年の人口万対6.8から1999年の34.9へと5倍を越える増加を示した(表3)。これは外来患者率の顕著な増加によるものであり、1999年においては外来医療が9割以上の比重を占めていた。性別にはどの年次も男より女の受療患者率が4割~6割程度は高くなっており、1999年においては女の外来患者率は統合失調症等を上回るものであった(表5)。年齢階級別の在院患者数(率)は、15-24歳および25-44歳では経年的に減少したが、45歳以上では高年齢になるほど増加する傾向がみられた。外来患者数(率)は、いずれの各年齢階級でも増加がみられた。受療患者率の最も高い65歳以上の

年齢階級では、1999年の受療患者率が人口万対で71.9（在院5.5、外来66.4）と推計された。

「神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害」は長期間にわたって統合失調症等に次いで受療患者数が多い疾患であったが、1999年には「気分〔感情〕障害」をわずかに下回り、第3位の41.8万人となった（表3）。その98%が外来患者である。受療患者率は経年的に増加傾向にあり、1980年代半ばからの増加が顕著であった。性別の各年次の受療患者率は男に比べて女がおおよそ5割増しであり、経年的に類似のパターンで増加していた（表6）。いずれの年齢階級でも経年的に増えており、1999年の65歳以上での人口万対52.6に達していた。

「アルコール使用による精神及び行動の障害」も、経年的にわずかに増加していた（表3）。1999年の受療患者率は、女が0.8であるのに対して、男が6.5と88%を占めていた（表7）。しかしながら、女の受療患者数は1974-76年の1.0千人から1999年の5.3千人へと明らかに増加し、性差は小さくなる傾向がみられた。

「精神遅滞」（知的障害）は、在院患者率には経年的に横這い状態であったが、外来患者率については増加が認められた（表3、表8）。

「血管性及び詳細不明の痴呆」の中にはアルツハイマー病などの神経疾患は含まれていないが、1974-76年の1.1万人から1999年の11.5万人へと激増した（表3）。65歳以上の受療患者率についても、1974-76年の人口万対11.4から1999年の52.2に増加しており、1999年については統合失調症等を上回る頻度であった。また、性別については、1999年の男が3.3万人であるのに対して、女は8.2万人と多くなっていた（表9）。

「その他の精神及び行動の障害」については、ICD10になって以降の最近の増加が著し

く、疾病分類の変更の影響について詳細に検討する必要がある（表10）。

2. 退院率の年次推移

2-1. 総数および病院種類別

精神疾患全体の1ヵ月間の退院患者数は、1974-76年には18千人であったものが1999年には27千人へと1.9倍の増加と推計された（表11）。しかし、この間には在院患者数も1.3倍増加していることから、退院率は1.4倍の上昇であった。さらに詳細にながめれば、長年にわたって低下してきた退院率は1980年代初めを底としてその後上昇・改善に明確に転じていた。

もっとも、この退院率の転換は、各年次に入院した患者コホートの真の在院期間がある時点まで長期化の一途を辿りその後短期化に転換したということ直には意味しない。退院率は現実的には病床回転部分の効果と非回転部分の効果によっておおよそ規定されており、この指標上での転換は入院患者コホートの在院期間分布の経年的短期化と長期在院患者の経年的蓄積増大とのバランスの変化を表していると思われる。この点については、後述する。

退院事由別では、治癒・軽快による退院率は全体の推移と同様に、1980年代初めを底として上昇に転じていた。死亡による退院数は1974-76年から1999年にかけて2.7倍に増加していた。しかし、この増加については、在院患者の年齢構成の高齢化を勘案する必要がある。転院・他の退院率についても1.9倍の上昇がみられた。

精神病院の退院率は、1980年代初めを底としてわずかに上昇していた（表11）。治癒・軽快による退院率についてもこの傾向はみられるが、やや軽微なものであった。一般病院など精神病院以外の病院では、退院患者数が経年的に顕著に増加しているが、在院患者数の増加も重なっており、退院率はやはり

1980年代初めを底とした上昇であった。また、精神病院とそれ以外の病院との間には病院の特性を反映して退院率の水準に顕著な差異が認められ、経時的に差異が広がった。

2-2. 性別および年齢階級別

性別の年次推移も総数とほぼ同様であり、退院患者数は増加し、退院率は1980年代初めを底として上昇に転じていた(表12)。男女間の治癒・軽快の退院率は、男より女の方が高率であった。

年齢階級別の在院患者数の年次推移については、35歳未満の各年齢階級では経年的に減少傾向にあり、35-44歳では1980年以降に減少傾向に転じ、45-54歳では微増してきたものが1980年代中盤からやや減少する傾向になり、それ以上の55歳以上の各年齢階級では増加、特に高年齢になるほど増加が著しい傾向にあることは、既に述べた。しかし、退院患者数の年次推移は、若年齢においてはこれと対応していなかった(表12)。すなわち、在院患者数が減少している35歳未満や35-44歳においても、退院患者数はほとんど減少せず、退院率(特に、治癒・軽快での退院率)は近年において顕著に上昇していることが示めされた。これに対して、45歳以上においては、退院患者数は増加してはいるものの、退院率は経年的に横這い状態ないし軽微な上昇であった。この年齢階級での(長期)在院患者の蓄積に関しては、生年コホートとしての分析がなされ、時代背景・精神医療の変遷と関連させた詳細な検討が報告されている。また、在院期間について年齢による差異が大きいことは、大阪市からの精神病院への入院患者を5年間追跡した報告によって示されている。

また、年齢階級別の退院率の水準は、45歳未満では若年齢ほど高率であるのに対して、45歳以上の年齢階級間の退院率の水準には大きな違いがあるとはいえなかった。もっとも、高年齢層では死亡や転院・他が多くなっ

ており、退院事由別の構成には年齢による違いがみられた。

このように25年間あまりの間の精神疾患にかかわる入院医療は、35-44歳を境として元々存在した退院率の年齢階級間の差異を拡大する方向で展開したといえる。

2-3. 診断別

精神疾患のうちで「統合失調症、分裂病型障害及び妄想性障害」(以下、統合失調症等)は、1999年については在院患者の64%、退院患者の34%を占め、最も患者数の多い疾患である。治癒・軽快による退院率は32~49%の間を変動し、近年やや上昇していた(表13)。退院率の水準は、「精神遅滞(知的障害)」に次いで低率であった。精神遅滞、統合失調症、老年期及び初老期の器質性精神病の在院継続が多いことは、追跡研究によっても明らかにされている。

統合失調症等での性別の年次推移も同様のパターンを取っていたが、全ての年次で男の退院率(および治癒・軽快での退院率)が低くなっており、しかも最近その差異が広がっていた(表14)。この性差は、男の平均在院日数が長期であるという報告とも一致している。年齢階級別では、45歳未満では退院患者数に大きな変化は見られなかったが、在院患者数が経年的に減少したことから、退院率(治癒・軽快での退院率)は経年的に顕著に上昇した。統合失調症の若年齢層の入院件数の経年的減少が報告されており、これと併せて退院率の高率化は若い統合失調症の在院割合を今後とも益々低下させて行くと考えられる。45歳以上の年齢階級での退院率は、1980年代初めを底としてわずかに上昇していた。また、治癒・軽快での退院率には年齢階級間で大きな差異があり、高年齢ほど低率であった。

躁うつ病を含む「気分〔感情〕障害」の受療患者率は、退院患者数が近年になって顕著に増加し、退院率は1980年代初めを底とし

て上昇していた(表13)。性別の退院率も類似的の傾向であったが、最近では女の退院率が高率になっていた(表15)。年齢との関連では、近年いずれの年齢階級でも退院率が上昇していたが、やや若年齢での上昇が著しかった。統合失調症等と比べて、転院・他による退院率が高率であるが、15-24歳などの若年齢で高率であった。

「神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害」の退院患者数は経年的に増加していないが、退院率が最も高率であり、1980年代初めを底として顕著に上昇していた(表13)。男に比べて、女の退院率が一貫して明らかに高率であった(表16)。年齢との関連では、若年齢ほど治癒・軽快での退院率が高いが、近年ではいずれの年齢階級でも退院率の上昇がみられた。

「アルコール使用による精神及び行動の障害」については、近年、退院患者数が増加し、また退院率も上昇していた(表13)。女の退院患者数は男と比べて少ないが、退院率は一貫して女が明らかに高率であった(表17)。また、年齢との関連では、25-44歳において退院率の著しい上昇がみられた。

「精神遅滞(知的障害)」は、最も来院率が低率であった(表13、表18)。このことは在院期間が精神疾患の中で最も長いことと符合している。また、「血管性及び詳細不明の痴呆」とともに、転院・他での退院が相対的に多くみられた。経年的には、1990年以降に退院率がやや上昇していた。

「血管性及び詳細不明の痴呆」の退院率は、「精神遅滞」、統合失調症等について3番目に低率であった(表13、表19)。近年、退院率の上昇がみられるが、転院・他と死亡による退院が相対的に多くを占めていた。

「その他の精神及び行動の障害」の退院率はわずかに上昇する傾向であった(表20)。

3. 在院にかかわる期間別患者数の年次推移

3-1. 総数、病院種類別および性別

1975年から1999年までの3年ごとの各年次の10月1日時点で病院に在院中の精神疾患患者の継続在院期間分布を、表21に示した。1999年での在院患者347千人の継続在院期間は、16%が3ヵ月未満、30%が1年未満、56%が5年未満であり、30%が10年以上の越える長期在院患者であった。

年次推移については、10年以上の在院患者の割合が1975年の20%から1993年の33%まで増加し、以降わずかに減少して1999年には30%となった。1990年代初めまで継続在院期間の経年的長期化が明らかに認められ、長期在院患者の蓄積が示されてきたが、最近になって歯止めがかかり、わずかに短期化の傾向がみられた。

病院種類別の在院患者数は、その他の病院で経年的増加がみられた。一貫して、その他の病院に比べて精神病院での継続在院期間が長い傾向であった。いずれの種類病院についても、1990年代初めまで継続在院期間の経年的長期化が明らかに認められ、最近になってわずかに短期化の傾向がみられた。

性別も、継続在院期間の年次推移のパターンは総数と同様であった。男と比べて、女での在院患者数の増加が著しいが、常に女の方が継続在院期間は短い傾向であった。

表22は、1975年から1996年までの3年ごとの各年次に病院へ入院した患者コホートの退院までの在院期間分布である。1996年の入院患者コホートについては3年までの在院しか確認できないことから、3年を越えるものをひとつの区分として表示した。1996年については347千人が入院して、その内の39%が1ヵ月未満に退院し、66%が3ヵ月未満、88%が1年未満に退院した。3年以上の長期在院は6%にすぎないと推定された。このように在院期間分布は、上述の表21の継続在院期間分布と比べて、明らかに短いものであった。

在院期間分布の年次推移については、3 ヶ月未満の退院割合では 1975 年の 55%から 1996 年の 66%へと増加がみられた。このように、在院期間分布は経年的に単調に短期化する傾向が認められた。

病院種類別の入院患者数は、その他の病院で明らかな経年的増加がみられた。一貫して、その他の病院に比べて精神病院での在院期間が長期間であるとともに、いずれの種類の病院についても在院期間分布は経年的に単調に短期化する傾向が認められた。

性別にも、在院期間の年次推移のパターンは同様に単調に短期化する傾向であった。また、男と比べて、女での入院患者数の増加が著しいが、女の方が在院期間はやや短い傾向であった。

3-2. 年齢階級別

在院患者の入院時点からその時点までの継続在院期間の分布には、年齢階級間で非常に大きな差異が存在していた(表 2 3)。死亡退院が多いと見られる 65 歳以上を別にすれば、継続在院期間が短期間である割合は高年齢になるに従って顕著に少なくなる傾向があった。1999 年での継続在院期間が 6 ヶ月未満の割合は、15~24 歳が 62%、25~34 歳が 42%、35~44 歳が 27%と少なくなり、45~54 歳及び 55~64 歳では 20%にも達していなかった。

また、継続在院期間の年次推移では、例えば 6 ヶ月未満の割合は、15~24 歳では 1975 年の 36%から 1999 年の 62%に顕著に増加し、25~34 歳では 25%から 42%への増加し、35~44 歳では 18%から 27%への増加し、45 歳以上ではほぼ横這い状態であった。10 年以上の長期継続在院の割合は、45~54 歳では 1975 年の 30%から 1990 年の 42%へと増加し、その後若干減少して 1999 年には 37%であった。55~64 歳でも 1975 年の 28%から 1990 年の 44%へと増加し、その後若干減少して 1999 年には 41%であった。この 2 つの中高齢の年

齢階級で 1990 年までの長期継続在院が著しかった。

表 2 4 は、各年次に入院した患者コホートの退院までの在院期間の年齢階級別の年次推移である。15~24 歳では 1996 年 1 年間に全国で 39 千人が入院して、その内の 59%が 1 ヶ月未満に退院し、79%が 3 ヶ月未満、90%が 6 ヶ月未満に退院した。3 年以上の長期在院している割合は 1.6%であった。また、在院期間の年次推移では、1 ヶ月未満の短期間での退院割合が 1975 年の 35%から 1996 年の 59%へと増加し、在院期間の短期化が進行した。15~24 歳と比べて 25~34 歳の在院期間分布は長い傾向はあるが、その推移は経年的に短期化の傾向がみられた。

1996 年における 35~44 歳以上の各年齢階級での在院期間の構成は、おおよそ類似していた。35~44 歳では、36%が 1 ヶ月未満に退院し、66%が 3 ヶ月未満、82%が 6 ヶ月未満に退院したと推計され、15~24 歳のものと比べて長期間在院になっていた。在院期間の年次推移を年齢階級間で比べれば、おおよそ高年齢の階級ほど年次短期化の進展が鈍くなっていた。

3-3. 診断別

「統合失調症、分裂病型障害及び妄想性障害」(以下、統合失調症等)の 1999 年 10 月時点の在院患者の継続在院期間は、1 年未満が 21%にすぎず、5 年未満が 45%であり、継続在院期間が 10 年以上の患者が 39%に及んだ(表 2 5)。1999 年 10 月末の全ての精神疾患在院患者 347 千人のうちで統合失調症等は 64% (221 千人)であったが、継続在院期間が 10 年以上の患者 102 千人の 84% (86 千人)が統合失調症等であった。精神医療の重大課題のひとつである長期継続在院患者の蓄積は統合失調症等の蓄積であることを端的に示す数字である。

年次推移においては、1990 年代初めまでの継続在院期間の顕著な長期化の動向が示さ

れた。継続在院期間が10年以上の在院患者の割合は、1975年の24%から1993年の41%へと激増しており、長期継続在院患者の経年的蓄積が明確であった。しかし、それ以降はわずかに減少して1999年には39%になった。長期継続在院患者の経年的蓄積に歯止めがかかったといえるが、今後、継続在院期間の一層の短期方向へのシフトが進み、ノーマライゼーションが進展するかに注目すべきである。

性別には、継続在院期間は一貫して女に比べて男で長い傾向があるが、年次推移においてはいずれの性についても1993年ごろまで長期化の一途を辿ってきたのが、それ以降ではわずかに短期化していた(表27)。

統合失調症等により1996年に入院した患者の退院までの在院期間は、3ヵ月未満が53%、6ヵ月未満が71%、1年未満が82%であり、3年以上の長期在院は10%であった(表26)。1996年に入院した全ての精神疾患患者347千人のうち36%(126千人)が統合失調症であったが、在院期間が3年以上の患者20千人のうち60%(11千人)を統合失調症等が占めていた。統合失調症の在院期間が、相対的に長期間であることがわかる。

しかし、在院期間の年次推移は、3ヵ月未満の比較的短期間での退院割合が1975年の38%から1996年の53%へと明らかに増加し、他の期間区切りについても同様にであった。すなわち、この20年余りにおいては統合失調症等の在院期間は特に近年において明確な短期化の傾向を示しており、懸念された退院までの在院期間の長期化の傾向はなかった。

性別には、在院期間は一貫して女に比べて男で長い傾向があるが、年次推移においてはいずれの性についても単調に短期化の方向に推移していた(表28)。

年齢との関連では、継続在院期間は死亡退院が比較的多いと思われる65歳以上を別に

すれば、継続在院期間が短期間である割合は高齢になるに従って顕著に少なくなる傾向があった(表27)。また、年次推移については、25-34歳では経年的な短期化の傾向が進行した。35歳以上の各年齢階級での3ヵ月未満や6ヵ月未満といった比較的短期の継続入院の割合は横ばい状態であったが、1990年以降において増加した。一方、10年以上の長期継続在院の割合は1990年前後まで増加したが、以降はやや減少していた。すなわち、いずれの年齢階級においても、1990年以降は継続在院期間の短期化の傾向が認められた。

退院までの在院期間も、高齢になるにしたがって長期間になっていた(表28)。年次推移については、程度の差はみられるが、いずれの年齢階級についても経年的な短期化が進行した。

「気分〔感情〕障害(躁うつ病を含む)」については、この約25年間の継続在院期間の分布に大きな変化はみられなかった(表25)。すなわち、在院患者の1/3余りが3ヵ月未満であり、55%から60%が1年未満であった。在院期間についても、1990年ごろまでは大きな変化もなく推移したが、それ以降はやや短期化の傾向を示した(表26)。1996年に入院した患者では、37%が1ヵ月未満で退院し、73%が3ヵ月未満で退院していた。

「神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害」については、在院患者の継続在院期間が1990年ごろまでは長期化の方向に推移したが、以降は短期化に転じていた(表25)。退院までの在院期間についても、1990年以降に短期化の傾向が認められた(表26)。1996年に入院したものの70%は1ヵ月未満で退院し、88%は3ヵ月未満で退院していた。

「アルコール使用〔飲酒〕による精神及び行動の障害」については、在院患者の継続在院期間は約25年間にわたって大きな変化がみられなかった(表25)。在院患者の

30%程度が1ヵ月未満であり、50%から60%が1年未満であった。一方、退院までの在院期間についても、1980年代末から短期化の傾向が認められた(表26)。1996年に入院したものの58%は1ヵ月未満で退院し、80%は3ヵ月未満で退院していた。

「精神遅滞(知的障害)」は、継続在院期間および在院期間とも、統合失調症等を超えて最も長期間となっていた。10年以上の継続在院している在院患者の割合は、1990年まで激増し、以降も横ばい状態を続けていた(表25)。一方、在院期間は、1990年に入ってから短期化する傾向がみられるようになった(表26)。

「血管性及び詳細不明の痴呆」については、継続在院期間は1990年以降にわずかに短くなる傾向がみられた(表25)。退院までの在院期間についても、1990年代に入ってから短期化していた(表26)。

D. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 渡辺ゆかり、藤田利治. 二次医療圏との関連からみた福岡県における精神障害者の受療実態. 日本公衆衛生雑誌 掲載予定.

2. 学会発表

- 1) 藤田利治. 病院報告及び患者調査を用いた精神疾患にかかわる長期在院の関連要因の検討. 第61回日本公衆衛生学会総会抄録集 200, 2002.
- 2) 渡辺ゆかり、藤田利治. 福岡県における精神障害者の受療件とその関連要因. 第61回日本公衆衛生学会総会抄録集 813, 2002.
- 3) 藤田利治. 精神疾患での在院期間の年次推移: 1975~1999年. 第67回日本民族衛生学会総会講演集 28-29, 2002.
- 4) 藤田利治. 精神病院での退院率の年次推移と関連要因. 第13回日本疫学会学術総会講演集 208, 2003.

附録: 継続在院期間及び在院期間の推定方法

対象期間を1974年1月から19YY年10月までとし、それを通し月で第1月~第MM月と表す。①在院患者についての継続在院期間別患者数と②ある期間中の入院患者についての在院期間別患者数は、(a)第i月に入院して第j月に退院した患者数と(b)第i月に入院して第MM月に在院中の患者数の推定値から求めることができる。

まず、第i月に入院して第j月に退院した患者数の推定についてである。これら患者の在院期間は、(j-i-1)月~(j-i)月以下、または、(j-i)月~(j-i+1)月以下であることから、それぞれの患者数を $x(i, j, 0)$ 、 $x(i, j, 1)$ とおく。

第j月の退院患者数が得られる場合(すなわち、患者調査退院患者票の調査月の場合)について、 $x(i, j, \delta)$ (ただし、 $\delta = 0, 1$)を求める。k番目の退院患者票の在院日数を d_k 日、重み定数(患者調査で定められている定数で、おおそ施設抽出率の逆数に当る)を w_k とおく。計算の便宜のために1か月を $m = 365/12$ 日とする。退院患者kに基づいて推定される $x(i, j, \delta)$ の部分 $x_k(i, j, \delta)$ と表すと、

$$x_k(j-D_k, j, 1) = \frac{m}{30} \times w_k \times (1 - c_k)$$

$$x_k(j-D_k-1, j, 0) = \frac{m}{30} \times w_k \times c_k$$

ただし、

$$D_k \text{ は、} (d_k/m) \text{ の小数点以下を切捨てた整数} \\ c_k = d_k/m - D_k$$

となる。この $x_k(i, j, \delta)$ をすべての退院患者票について算出し、それを合計すれば $x(i, j, \delta)$ が求められる。ここで、退院患者kは在院日数 d_k から2つの入院月の入院月に入る可能性があるため、振分け係数 c_k によって退院患者kに基づいて推定される患者数を2つの入

院月に配分している。

第 j 月が退院患者票の調査月でなく直接には得られない場合には、直近の 2 つの調査月の対応する在院月数別患者数の推定値を内挿して、 $x(i, j, \delta)$ を求める。

次に、第 i 月に入院して第 MM 月 (19YY 年 10 月) 末時点で在院中の患者数を $x(i, \cdot)$ と表す。1987 年 (10 月 14~16 日) の患者調査から在院患者の入院日数別患者数が調査されることになったことから、 $x(i, \cdot)$ は患者調査によって推定可能である。

①在院期間別患者数の推定

期間 I (たとえば、1984 年の 1 年間) に入院した患者コホートのなかで、在院期間が r 月 ~ (r + 1) 月以下で退院した患者数を $y(I, r)$ とおくと、

$$y(I, r) = \sum_{i \in I} \{x(i, i+r, 1) + x(i, i+r+1, 0)\}$$

となる。区間 I での全ての入院患者数 $y(I, \cdot)$ は、

$$y(I, \cdot) = \sum_{i \in I} \left\{ \sum_{j=i}^n x(i, j, 1) + \sum_{j=i+1}^n x(i, j, 0) + x(i, \cdot) \right\}$$

と求められる。

②継続在院期間別患者数の推定

第 t 月末時点における在院患者について、入院時点からその時点までの継続在院期間が s 月 ~ (s + 1) 月以下の患者数 $z(t, s)$ とおくと、

$$z(t, s) = \sum_{j=t+1}^n \{x(t-s, j, 0) + x(t-s, j, 1)\} + x(t-s, \cdot)$$

となる。また、第 t 月末時点での在院患者数 $z(t, \cdot)$ は、

$$z(t, \cdot) = \sum_{i \leq t} \left[\sum_{j=t+1}^n \{x(i, j, 0) + x(i, j, 1)\} + x(i, \cdot) \right]$$

と求められる。

附表 対象疾患の分類コード

	第10回修正	第9回修正
精神及び行動の障害		
精神分裂病、分裂病型障害及び妄想障害	F20-F29	295, 297, 298.2-298.9
気分〔感情〕障害 (躁うつ病を含む)	F30-F39	296, 298.0-298.1, 300.4, 311
神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現障害	F40-F48	300, 306, 308-309
アルコール使用<飲酒>による精神及び行動の障害	F10	291, 303, 305.0
精神遅滞 (知的障害)	F70-F79	317-319
血管性及び詳細不明の痴呆	F01, F03	290.1-290.9
その他の精神及び行動の障害	F00-F99の残り	除外傷病を除く 290-319の残り
除外傷病		290.1, 294.1, 307.8

表1 精神疾患の受療有病率の年次推移

<病院・一般診療所>

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
総数						
1974-76年	251.9	409.9	661.8	22.7	36.9	59.6
1977-79年	270.0	404.4	674.4	23.6	35.3	58.9
1980-82年	294.8	537.8	832.6	25.2	45.9	71.0
1984年	309.4	691.3	1,000.8	25.9	57.8	83.7
1987年	325.6	846.8	1,172.4	29.1	75.6	104.7
1990年	336.8	1,153.6	1,490.4	27.4	94.0	121.4
1993年	318.2	1,023.2	1,341.4	25.7	82.7	108.4
1996年	325.9	1,557.3	1,883.2	26.1	124.9	151.0
1999年	333.5	1,480.6	1,814.2	26.6	118.0	144.6
一般診療所						
1974-76年	0.4	132.7	133.0	0.0	11.9	12.0
1977-79年	0.6	93.7	94.3	0.0	8.2	8.2
1980-82年	0.9	188.6	189.5	0.1	16.1	16.1
1984年	0.8	138.6	139.4	0.1	11.6	11.7
1987年	1.7	270.3	272.0	0.2	24.1	24.3
1990年	0.8	391.7	392.5	0.1	31.9	32.0
1993年	1.1	297.7	298.8	0.1	24.0	24.1
1996年	1.1	580.3	581.3	0.1	46.5	46.6
1999年	2.2	522.7	524.9	0.2	41.7	41.8
病院						
1974-76年	251.5	277.2	528.8	22.7	25.0	47.6
1977-79年	269.4	310.7	580.2	23.5	27.1	50.7
1980-82年	293.9	349.1	643.0	25.1	29.8	54.9
1984年	308.6	552.7	861.4	25.8	46.2	72.1
1987年	323.9	576.5	900.4	28.9	51.5	80.4
1990年	335.9	762.0	1,097.9	27.4	62.1	89.5
1993年	317.1	725.5	1,042.6	25.6	58.6	84.2
1996年	324.8	977.0	1,301.8	26.0	78.3	104.4
1999年	331.3	957.9	1,289.3	26.4	76.4	102.8
<再掲>						
精神病院						
1974-76年	186.1	130.1	316.3	16.8	11.7	28.5
1977-79年	204.2	141.5	345.7	17.8	12.4	30.2
1980-82年	224.2	170.1	394.3	19.1	14.5	33.7
1984年	229.2	258.4	487.6	19.2	21.6	40.8
1987年	233.0	247.2	480.2	20.8	22.1	42.9
1990年	248.5	337.1	585.6	20.2	27.5	47.7
1993年	228.3	289.5	517.8	18.4	23.4	41.8
1996年	231.7	403.8	635.5	18.6	32.4	51.0
1999年	225.7	384.5	610.2	18.0	30.7	48.6
精神病院以外の病院						
1974-76年	65.4	147.1	212.5	5.9	13.3	19.1
1977-79年	65.2	169.2	234.4	5.7	14.8	20.5
1980-82年	69.7	179.0	248.7	5.9	15.3	21.2
1984年	79.4	294.4	373.8	6.6	24.6	31.3
1987年	90.9	329.3	420.2	8.1	29.4	37.5
1990年	87.5	424.8	512.3	7.1	34.6	41.7
1993年	88.7	436.1	524.8	7.2	35.2	42.4
1996年	93.1	573.2	666.4	7.5	46.0	53.4
1999年	105.7	573.4	679.1	8.4	45.7	54.1

表2-1 精神疾患の受療有病率の年次推移, 性別および年齢階級別

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
男						
1974-76年	146.2	181.2	327.4	26.8	33.2	60.0
1977-79年	154.8	195.1	349.9	27.5	34.6	62.1
1980-82年	170.7	252.9	423.6	29.6	43.9	73.5
1984年	175.8	325.8	501.6	29.9	55.4	85.3
1987年	181.4	370.9	552.3	30.4	62.1	92.5
1990年	185.4	497.2	682.5	30.8	82.5	113.3
1993年	171.9	445.8	617.7	28.3	73.4	101.7
1996年	172.9	671.5	844.3	28.3	109.9	138.2
1999年	173.2	627.1	800.2	28.2	102.2	130.4
女						
1974-76年	105.7	228.7	334.4	18.7	40.5	59.2
1977-79年	115.2	209.3	324.5	19.8	36.0	55.8
1980-82年	124.1	284.8	408.9	20.8	47.8	68.6
1984年	133.6	365.6	499.2	22.0	60.2	82.2
1987年	144.1	475.9	620.1	23.3	77.0	100.3
1990年	151.4	656.4	807.9	24.2	105.1	129.3
1993年	146.3	577.5	723.7	23.2	91.6	114.8
1996年	153.0	885.9	1,038.8	24.1	139.3	163.4
1999年	160.4	853.6	1,013.9	25.0	133.2	158.2
15歳未満						
1974-76年	1.0	11.0	12.0	0.4	4.1	4.5
1977-79年	1.1	22.7	23.8	0.4	8.3	8.6
1980-82年	0.9	12.5	13.4	0.3	4.6	4.9
1984年	1.4	23.2	24.6	0.5	8.8	9.3
1987年	1.1	16.6	17.6	0.4	6.7	7.2
1990年	1.3	21.3	22.6	0.6	9.5	10.1
1993年	1.1	26.8	27.8	0.5	12.9	13.4
1996年	1.1	39.2	40.3	0.6	20.0	20.6
1999年	1.1	35.2	36.4	0.6	18.9	19.6
15-24歳						
1974-76年	22.9	36.1	59.0	13.5	21.3	34.8
1977-79年	16.8	36.0	52.9	10.5	22.5	33.0
1980-82年	14.2	35.9	50.1	8.9	22.5	31.4
1984年	13.6	49.2	62.8	8.1	29.4	37.5
1987年	11.6	51.3	62.9	6.5	28.6	35.1
1990年	11.6	76.3	87.9	6.2	40.8	47.0
1993年	9.3	69.5	78.8	4.9	36.7	41.6
1996年	8.4	100.9	109.3	4.7	56.5	61.2
1999年	7.2	83.4	90.6	4.4	51.0	55.4
25-34歳						
1974-76年	63.5	79.9	143.5	32.2	40.5	72.7
1977-79年	60.3	84.7	145.1	30.5	42.9	73.4
1980-82年	58.7	102.9	161.6	30.1	52.8	82.8
1984年	46.1	121.2	167.3	26.6	70.0	96.6
1987年	35.0	124.9	159.9	22.0	78.5	100.5
1990年	28.1	158.7	186.8	17.9	101.1	119.1
1993年	23.9	142.3	166.2	14.9	88.6	103.5
1996年	22.1	206.1	228.1	13.0	121.4	134.4
1999年	20.5	225.0	245.6	11.3	123.6	134.9

表2-2 精神疾患の受療有病率の年次推移，年齢階級別

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
35-44歳						
1974-76年	68.8	98.9	167.8	41.5	59.6	101.2
1977-79年	73.5	90.7	164.2	42.4	52.2	94.6
1980-82年	73.0	121.4	194.5	41.9	69.6	111.5
1984年	77.0	150.8	227.7	39.8	78.0	117.8
1987年	74.0	186.1	260.1	37.3	93.8	131.2
1990年	69.3	241.5	310.8	35.4	123.5	158.9
1993年	54.7	191.6	246.3	30.3	106.1	136.4
1996年	41.6	245.6	287.3	25.8	152.0	177.8
1999年	34.5	234.2	268.6	22.1	150.5	172.6
45-54歳						
1974-76年	48.9	83.8	132.8	37.3	63.9	101.3
1977-79年	59.7	82.0	141.7	41.0	56.4	97.4
1980-82年	70.2	112.9	183.1	45.2	72.7	117.9
1984年	75.1	140.3	215.4	47.2	88.0	135.2
1987年	81.6	172.1	253.7	48.9	103.1	152.0
1990年	81.2	234.0	315.2	47.6	137.2	184.8
1993年	76.1	201.7	277.7	42.1	111.5	153.6
1996年	78.3	302.2	380.5	40.0	154.6	194.6
1999年	74.4	273.7	348.1	38.8	142.9	181.7
55-64歳						
1974-76年	26.6	53.6	80.2	30.0	60.5	90.6
1977-79年	31.5	47.8	79.3	33.4	50.7	84.1
1980-82年	38.8	82.8	121.6	37.0	78.8	115.8
1984年	48.2	115.8	164.1	40.3	96.9	137.2
1987年	60.7	151.5	212.2	45.6	113.8	159.3
1990年	70.8	215.4	286.1	49.0	149.1	198.0
1993年	72.8	187.7	260.5	48.1	124.1	172.3
1996年	77.6	276.3	353.9	49.6	176.4	226.0
1999年	80.1	237.7	317.8	48.7	144.5	193.2
65-74歳						
1974-76年	13.7	35.4	49.1	22.9	59.1	82.0
1977-79年	18.0	29.7	47.7	27.3	45.1	72.5
1980-82年	23.5	47.5	71.0	33.0	66.3	99.2
1984年	26.5	61.0	87.4	35.4	81.4	116.8
1987年	31.4	95.7	127.1	39.0	118.8	157.7
1990年	37.2	133.4	170.6	41.8	149.9	191.7
1993年	41.4	131.8	173.2	40.7	129.4	170.1
1996年	50.7	246.2	296.9	44.1	214.0	258.0
1999年	59.4	235.0	294.4	47.0	185.8	232.8
75歳以上						
1974-76年	5.9	10.5	16.4	21.0	37.0	58.0
1977-79年	8.8	10.3	19.1	26.3	30.7	57.1
1980-82年	15.2	21.3	36.5	40.0	55.5	95.5
1984年	21.4	29.5	50.8	48.3	66.6	114.9
1987年	30.1	48.6	78.7	57.7	93.3	151.0
1990年	37.2	71.2	108.4	62.3	119.3	181.6
1993年	38.7	69.2	107.9	58.1	104.0	162.0
1996年	45.6	133.1	178.7	61.3	178.7	240.0
1999年	55.9	151.0	206.9	65.9	178.3	244.3

表3 精神疾患の受療有病率の年次推移、診断別

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
統合失調症、分裂病型障害及び妄想性障害						
1974-76年	181.1	111.2	292.3	16.3	10.0	26.3
1977-79年	191.8	122.5	314.3	16.7	10.7	27.4
1980-82年	206.5	153.8	360.3	17.6	13.1	30.8
1984年	211.9	236.1	448.0	17.7	19.7	37.5
1987年	217.1	250.5	467.5	19.4	22.4	41.8
1990年	225.9	318.6	544.5	18.4	26.0	44.4
1993年	214.3	286.7	501.0	17.3	23.2	40.5
1996年	216.6	503.0	719.6	17.4	40.3	57.7
1999年	213.5	455.3	668.8	17.0	36.3	53.3
気分〔感情〕障害(躁うつ病を含む)						
1974-76年	13.7	62.1	75.8	1.2	5.6	6.8
1977-79年	13.8	64.9	78.7	1.2	5.7	6.9
1980-82年	15.4	109.8	125.2	1.3	9.4	10.7
1984年	17.4	158.9	176.3	1.5	13.3	14.8
1987年	20.9	220.4	241.3	1.9	19.7	21.6
1990年	20.2	363.1	383.3	1.6	29.6	31.2
1993年	20.5	272.6	293.2	1.7	22.0	23.7
1996年	22.3	409.1	431.4	1.8	32.8	34.6
1999年	25.5	411.8	437.3	2.0	32.8	34.9
神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害						
1974-76年	12.4	172.8	185.1	1.1	15.6	16.7
1977-79年	13.6	156.3	170.0	1.2	13.7	14.8
1980-82年	14.5	215.8	230.3	1.2	18.4	19.6
1984年	17.6	208.2	225.9	1.5	17.4	18.9
1987年	16.8	289.8	306.7	1.5	25.9	27.4
1990年	14.2	352.1	366.2	1.2	28.7	29.8
1993年	12.6	355.8	368.4	1.0	28.7	29.8
1996年	7.2	453.9	461.1	0.6	36.4	37.0
1999年	7.0	411.1	418.1	0.6	32.8	33.3
アルコール使用〔飲酒〕による精神及び行動の障害						
1974-76年	15.9	10.7	26.6	1.4	1.0	2.4
1977-79年	17.2	10.6	27.8	1.5	0.9	2.4
1980-82年	19.0	14.6	33.6	1.6	1.2	2.9
1984年	19.3	14.2	33.5	1.6	1.2	2.8
1987年	20.3	18.0	38.3	1.8	1.6	3.4
1990年	19.4	26.3	45.7	1.6	2.1	3.7
1993年	17.1	19.6	36.7	1.4	1.6	3.0
1996年	17.2	40.4	57.7	1.4	3.2	4.6
1999年	17.4	27.6	45.0	1.4	2.2	3.6
精神遅滞(知的障害)						
1974-76年	12.8	9.2	22.0	1.2	0.8	2.0
1977-79年	14.3	15.7	30.0	1.2	1.4	2.6
1980-82年	14.5	10.0	24.5	1.2	0.8	2.1
1984年	13.6	32.3	45.9	1.1	2.7	3.8
1987年	15.0	18.4	33.5	1.3	1.6	3.0
1990年	14.5	17.2	31.7	1.2	1.4	2.6
1993年	13.3	21.3	34.6	1.1	1.7	2.8
1996年	12.3	29.7	42.0	1.0	2.4	3.4
1999年	10.1	30.3	40.4	0.8	2.4	3.2
血管性及び詳細不明の痴呆(65歳以上)						
1974-76年	7.4	2.6	10.1	8.4	3.0	11.4
1977-79年	10.4	5.3	15.8	10.5	5.3	15.8
1980-82年	18.1	12.5	30.6	16.6	11.4	27.9
1984年	22.2	19.4	41.6	18.6	16.3	34.9
1987年	28.5	27.1	55.6	21.4	20.4	41.9
1990年	33.7	42.8	76.5	22.7	28.8	51.4
1993年	32.3	31.7	63.9	19.2	18.8	38.0
1996年	34.6	49.0	83.6	18.3	25.9	44.1
1999年	43.4	66.8	110.3	20.6	31.7	52.2

表4 診断別の受療有病率の年次推移, 性別及び年齢階級別

統合失調症, 分裂病型障害及び妄想性障害

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
男						
1974-76年	103.8	53.6	157.4	19.0	9.8	28.8
1977-79年	108.5	63.9	172.4	19.2	11.3	30.6
1980-82年	118.9	75.9	194.8	20.6	13.2	33.8
1984年	121.2	116.6	237.8	20.6	19.8	40.5
1987年	123.8	117.6	241.3	20.7	19.7	40.4
1990年	127.9	148.5	276.3	21.2	24.6	45.9
1993年	120.7	133.0	253.6	19.9	21.9	41.8
1996年	119.8	242.0	361.7	19.6	39.6	59.2
1999年	117.3	215.3	332.6	19.1	35.1	54.2
女						
1974-76年	77.3	57.5	134.9	13.7	10.2	23.9
1977-79年	83.3	58.6	141.9	14.3	10.1	24.4
1980-82年	87.6	77.9	165.5	14.7	13.1	27.8
1984年	90.7	119.4	210.1	14.9	19.7	34.6
1987年	93.3	132.9	226.2	15.1	21.5	36.6
1990年	98.0	170.1	268.2	15.7	27.2	42.9
1993年	93.6	153.8	247.4	14.9	24.4	39.2
1996年	96.9	261.0	357.9	15.2	41.0	56.3
1999年	96.2	240.0	336.2	15.0	37.5	52.5
15-24歳						
1974-76年	15.8	14.3	30.0	9.3	8.4	17.7
1977-79年	11.0	12.7	23.7	6.9	7.9	14.8
1980-82年	8.6	11.6	20.2	5.4	7.3	12.7
1984年	7.6	17.8	25.3	4.5	10.6	15.1
1987年	6.5	17.0	23.5	3.6	9.5	13.1
1990年	7.0	23.3	30.3	3.7	12.5	16.2
1993年	5.6	20.3	25.9	3.0	10.7	13.7
1996年	5.5	38.9	44.4	3.1	21.8	24.8
1999年	4.4	27.4	31.8	2.7	16.8	19.4
25-44歳						
1974-76年	103.8	70.9	174.6	28.6	19.5	48.1
1977-79年	105.2	73.7	178.9	28.3	19.9	48.2
1980-82年	104.3	93.1	197.4	28.2	25.2	53.4
1984年	97.1	131.9	229.0	26.5	36.0	62.5
1987年	85.2	137.7	222.9	23.8	38.5	62.4
1990年	77.8	162.0	239.8	22.1	45.9	68.0
1993年	61.9	136.9	198.7	18.1	40.1	58.3
1996年	49.8	211.6	261.4	15.0	63.9	78.9
1999年	42.3	185.8	228.0	12.5	55.0	67.5
45-64歳						
1974-76年	54.2	23.8	78.0	24.7	10.9	35.5
1977-79年	65.9	28.9	94.8	27.5	12.0	39.5
1980-82年	80.4	45.0	125.4	30.9	17.3	48.3
1984年	91.3	76.9	168.1	32.7	27.6	60.3
1987年	105.2	85.1	190.2	35.1	28.3	63.4
1990年	114.6	117.0	231.6	36.4	37.1	73.5
1993年	114.8	108.3	223.0	34.6	32.6	67.2
1996年	121.3	197.5	318.8	34.5	56.1	90.5
1999年	120.1	189.0	309.1	33.7	53.1	86.8
65歳以上						
1974-76年	6.8	1.7	8.5	7.8	1.9	9.6
1977-79年	9.3	2.3	11.6	9.3	2.3	11.7
1980-82年	12.9	3.8	16.7	11.8	3.5	15.3
1984年	15.8	8.9	24.7	13.3	7.5	20.8
1987年	20.0	10.6	30.6	15.1	8.0	23.1
1990年	26.4	15.5	42.0	17.8	10.4	28.2
1993年	31.8	20.4	52.1	18.9	12.1	31.0
1996年	39.5	50.6	90.0	20.8	26.7	47.5
1999年	46.2	49.9	96.2	21.9	23.7	45.5

表5 診断別の受療有病率の年次推移, 性別及び年齢階級別

気分〔感情〕障害(躁うつ病を含む)

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
男						
1974-76年	6.5	24.0	30.5	1.2	4.4	5.6
1977-79年	6.5	28.1	34.6	1.2	5.0	6.1
1980-82年	7.5	45.9	53.3	1.3	8.0	9.2
1984年	8.0	64.7	72.7	1.4	11.0	12.4
1987年	9.3	91.2	100.5	1.6	15.3	16.8
1990年	8.6	139.3	147.9	1.4	23.1	24.5
1993年	8.5	111.3	119.8	1.4	18.3	19.7
1996年	9.0	149.3	158.3	1.5	24.4	25.9
1999年	9.6	150.5	160.1	1.6	24.5	26.1
女						
1974-76年	7.2	38.1	45.3	1.3	6.8	8.0
1977-79年	7.3	36.8	44.1	1.3	6.3	7.6
1980-82年	8.0	64.0	71.9	1.3	10.7	12.1
1984年	9.4	94.3	103.6	1.5	15.5	17.1
1987年	11.7	129.2	140.8	1.9	20.9	22.8
1990年	11.6	223.8	235.4	1.9	35.8	37.7
1993年	12.1	161.4	173.4	1.9	25.6	27.5
1996年	13.3	259.8	273.1	2.1	40.9	42.9
1999年	15.9	261.3	277.2	2.5	40.8	43.3
15-24歳						
1974-76年	1.4	4.3	5.7	0.8	2.5	3.4
1977-79年	1.0	3.0	4.0	0.6	1.9	2.5
1980-82年	0.9	5.5	6.4	0.6	3.4	4.0
1984年	0.9	6.6	7.5	0.5	3.9	4.5
1987年	0.8	6.9	7.7	0.5	3.8	4.3
1990年	0.6	13.1	13.7	0.3	7.0	7.3
1993年	0.5	9.6	10.1	0.3	5.1	5.3
1996年	0.5	14.0	14.5	0.3	7.8	8.1
1999年	0.5	13.7	14.2	0.3	8.4	8.7
25-44歳						
1974-76年	4.9	19.0	23.9	1.4	5.2	6.6
1977-79年	4.6	19.6	24.2	1.2	5.3	6.5
1980-82年	5.3	31.5	36.7	1.4	8.5	9.9
1984年	5.1	46.3	51.5	1.4	12.6	14.0
1987年	5.3	60.0	65.4	1.5	16.8	18.3
1990年	4.1	102.2	106.3	1.2	29.0	30.1
1993年	4.0	64.5	68.5	1.2	18.9	20.1
1996年	3.4	81.1	84.4	1.0	24.5	25.5
1999年	3.5	107.5	111.1	1.0	31.9	32.9
45-64歳						
1974-76年	5.1	28.5	33.6	2.3	13.0	15.3
1977-79年	5.6	30.9	36.5	2.3	12.9	15.2
1980-82年	6.2	54.7	61.0	2.4	21.0	23.4
1984年	7.3	76.3	83.6	2.6	27.4	30.0
1987年	8.9	101.5	110.4	3.0	33.8	36.8
1990年	9.0	169.8	178.8	2.9	53.9	56.8
1993年	8.6	122.6	131.2	2.6	36.9	39.5
1996年	9.2	164.0	173.2	2.6	46.6	49.2
1999年	9.7	147.7	157.4	2.7	41.5	44.2
65歳以上						
1974-76年	2.1	9.9	12.0	2.4	11.2	13.7
1977-79年	2.6	11.3	13.9	2.6	11.4	14.0
1980-82年	3.0	17.6	20.6	2.7	16.0	18.7
1984年	4.0	29.4	33.4	3.4	24.7	28.1
1987年	5.9	51.6	57.5	4.4	38.9	43.3
1990年	6.5	77.0	83.5	4.4	51.8	56.2
1993年	7.4	75.2	82.6	4.4	44.7	49.1
1996年	9.2	147.9	157.1	4.9	78.0	82.9
1999年	11.6	140.2	151.8	5.5	66.4	71.9

表6 診断別の受療有病率の年次推移, 性別及び年齢階級別

神経症性障害, ストレス関連障害及び身体表現性障害

	受療患者数(千人)			受療有病率(人口万対)		
	在院	外来	計	在院	外来	計
男						
1974-76年	5.8	66.0	71.8	1.1	12.1	13.1
1977-79年	6.1	65.4	71.5	1.1	11.6	12.7
1980-82年	6.5	94.6	101.1	1.1	16.4	17.5
1984年	8.2	92.0	100.2	1.4	15.6	17.0
1987年	7.8	115.4	123.2	1.3	19.3	20.6
1990年	6.4	144.6	151.1	1.1	24.0	25.1
1993年	5.4	143.6	148.9	0.9	23.6	24.5
1996年	2.8	179.1	181.9	0.5	29.3	29.8
1999年	2.6	159.9	162.5	0.4	26.1	26.5
女						
1974-76年	6.6	106.8	113.3	1.2	18.9	20.1
1977-79年	7.5	90.9	98.4	1.3	15.6	16.9
1980-82年	8.0	121.1	129.2	1.3	20.3	21.7
1984年	9.5	116.3	125.7	1.6	19.1	20.7
1987年	9.1	174.4	183.5	1.5	28.2	29.7
1990年	7.7	207.5	215.2	1.2	33.2	34.4
1993年	7.2	212.2	219.5	1.1	33.7	34.8
1996年	4.5	274.8	279.2	0.7	43.2	43.9
1999年	4.4	251.2	255.5	0.7	39.2	39.9
15-24歳						
1974-76年	2.4	12.6	15.0	1.4	7.4	8.9
1977-79年	2.1	14.7	16.8	1.3	9.2	10.5
1980-82年	2.1	15.3	17.4	1.3	9.6	10.9
1984年	2.8	16.3	19.1	1.7	9.7	11.4
1987年	2.1	19.6	21.7	1.2	10.9	12.1
1990年	1.7	28.7	30.4	0.9	15.4	16.2
1993年	1.3	30.6	32.0	0.7	16.2	16.9
1996年	0.7	32.1	32.8	0.4	17.9	18.4
1999年	0.7	29.1	29.8	0.4	17.8	18.2
25-44歳						
1974-76年	6.3	66.9	73.3	1.7	18.4	20.2
1977-79年	6.9	63.1	70.0	1.9	17.0	18.8
1980-82年	7.0	85.2	92.1	1.9	23.0	24.9
1984年	8.0	76.1	84.1	2.2	20.8	23.0
1987年	6.7	97.5	104.2	1.9	27.3	29.2
1990年	5.2	119.0	124.2	1.5	33.8	35.2
1993年	4.1	115.5	119.6	1.2	33.9	35.1
1996年	1.9	126.4	128.3	0.6	38.2	38.7
1999年	1.7	127.3	129.0	0.5	37.7	38.2
45-64歳						
1974-76年	2.7	67.4	70.1	1.2	30.6	31.9
1977-79年	3.3	54.0	57.3	1.4	22.6	24.0
1980-82年	3.8	82.1	85.9	1.5	31.5	33.0
1984年	4.6	83.8	88.4	1.7	30.1	31.7
1987年	5.4	118.3	123.7	1.8	39.4	41.2
1990年	4.8	137.4	142.2	1.5	43.6	45.1
1993年	4.3	134.6	138.8	1.3	40.5	41.8
1996年	2.2	171.1	173.3	0.6	48.6	49.2
1999年	2.0	137.9	139.9	0.6	38.7	39.3
65歳以上						
1974-76年	0.7	21.9	22.5	0.8	24.8	25.5
1977-79年	1.1	17.0	18.1	1.1	17.2	18.3
1980-82年	1.3	29.4	30.7	1.2	26.7	27.9
1984年	1.9	29.2	31.0	1.6	24.5	26.0
1987年	2.3	50.4	52.7	1.8	38.0	39.7
1990年	2.3	60.1	62.3	1.5	40.4	41.9
1993年	2.6	66.0	68.6	1.6	39.2	40.8
1996年	2.2	112.5	114.7	1.1	59.4	60.5
1999年	2.4	108.7	111.1	1.1	51.5	52.6